令和6年度 第1回徳島県いじめ問題等対策審議会 議事録

日 時 令和6年5月28日（火）午前9時30分から午前11時30分
まで

場 所 10階 特別大会議室

出席者 14名

会議概要

1 開会

(1) 教育委員会あいさつ

(2) 会長あいさつ

2 議事

(1) いじめ問題等における課題

(2) その他

3 閉会

1 開会

会長あいさつ 本年度新たに委員になった方、昨年から引き続きの方もおられるが、徳島県のいじめ未然防止、早期対応、いじめ対策について、地域・学校・家庭が連携して子どもたちにとって何をしていったらいいのか、皆さんと一緒に協議していきたい。

事務局より資料を説明

資料1 いじめの調査件数について

資料2 いじめの重大事態について

資料3 不登校・いじめ対策パッケージ

2 協議

会長 今回は、いじめの重大事態を防ぐ取組について協議したい。いじめを見逃さないこと、資料のなかでいじめを認知していたが深刻化したというケースもあり、いじめの重大事態が起こらないために、早期発見・早期対応が大切である。子ども達のSOSを見逃さない対応について、学校・家庭・地域社会でできることについてご意見等をいただきたい。また、好事例があれば紹介していただきたい。

委員 冷やかしやからかいなど、日常会話の中の言葉がいじめにつ

ながることが多く、その部分を見逃さない指導をしていく大切さを感じた。毎年、この会議で今の時代はどのような時代なのか考えているが、コロナ期が終わり普通に戻ったとはいえ、まだまだ模索している時期だと思う。元気が出ない子が多く不登校も増え、やっと登校できたとしても、ちょっとしたことで冷やかされ落ち込んでしまうといった事案も聞いた。また、職員室の先生方も少し疲れているなということを感じている。

会長 冷やかしやからかいについては、遊びの延長でいじめではないと思っている子もいる。我慢して言いたいことを言えないのも困るので、適切な言葉で自己主張をすることを学校や家庭でも教えていく必要がある。

委員 自己申告や保護者らの訴え、アンケートの重要性がよく分かるが、子ども達からの訴えが少ないと改めて思う。また、少数だが声をあげている子や、いけないことをいけないと言える子がいることが大事だと思う。相談が一番多いのは学校の先生だと思うが、子ども達がSOSを出すのに、パンフレットなどを見て相談してもいいと周知し続けることも大事だと思う。人間は不思議なもので、自分がそういう環境に置かれると、メッセージがグッと入ってくる時があることを大人になって感じるようになった。もう一つは、いじめ未然防止のための学校づくりにおいて、資料3のなかに生徒一人一人を理解するための職員会議や校内研修が必要だと示されている。これは当たり前のことだがとても大事なことである。悩んでいる子がいた時に支えてあげるという意識が大事で、先生方はそういう意識で臨まれていると思うが、周りの大人もそういう意識を持たなければいけない。

会長 学校だけに任せず、地域や家庭もアンテナを張りながら、いつでも相談してもらえるように、こちらが受け止めることが大切である。

委員 まず、持参したいじめ根絶を目指した資料についての説明ですが、これまでは冊子のみだったが、約200ページの資料をQRコードから見るできるよう作成した。教育委員会から発信しており、どのように学校現場で活用していくかが課題である。二つ目に、いじめに関しては学校でもしっか

り対応しながら、どうして件数が増加するのかを考えると、やはり対応に課題があるのではないかと感じている。いじめをどうしたら減らしていけるかという、幼稚園や小学校低学年の教育や躰が最適であり重要だと考えている。三つ目のいじめの重大事態に関しては、いじめが分かった段階での初期対応を適切に行い、対応することにつきると思う。教育委員会としては、緊急かつ重大事態と認定した場合には、教育委員会で緊急対策会議を立ち上げ、そこから第三者委員会につなげるというマニュアルを作成している。

会長 教育委員会で作成された資料が、QRコードをかざしてすぐに利用できるのが大変活用しやすい。あと、いじめかもしれないという事案については、しっかり認知してほしいし、重大事態にならないように先に手を打つ、何かあればすぐに先生に相談する事ができれば重大事態の防止につながる。マニュアルを作成して、できるだけ使用せずに済むようになればいい。

委員 資料2の内容で、いじめとして認知していながら重大事態になってしまったケースもあり、学校現場の取組に課題があるのではないかという説明があったが、今、現場の教員は多忙で疲弊しており、ゆとりがない状況である。教員の数が足りていない学校もある。もちろん、そのような中でも現場の先生方は子どもたちを大事にして精一杯取り組んでいるが、気付くアンテナをより高く持てるようにするには、教員が時間的にも心にもゆとりがあってこそできることだと思う。少しでも気になることがあれば、同僚の先生に相談できる環境が大事だが、業務をこなしていくのが精一杯の状況だと感じている。子どもも学校に行って楽しいと思えると表情も変わってくると思うが、そのためには、大人にも子供にもゆとりがあることが大事だと思うので、現場に携わる者からすると、まずは、各校に配置する教員数を増やして多くの目でアンテナを張って見ることで、よりきめ細やかな見取りができるのではないかと思う。

会長 確かに先生方の業務が増加している。

委員 教員にゆとりがなくなると視野も狭くなるし、穏やかに受け止めてあげられなくなる。子どもからすると自分の話を聞いて共感してくれることが大切で、安心感を持って学校生活を

送るとするのが一番かなと思う。例えば、それが小学校であれば担任がほとんどの教科を担うので、授業の中で道徳の時間だけではなく、常に生活の中で相手の意見を大事にして人権意識を高めていくようにしている。そういうことを考えることにもっと時間を割きたいが、なかなか難しい。子どもたちが学校の中で、この人になら話したいと思える人が一人でも多く居るような学校を作っていくには、時間的にもゆとりがある方がいいし、そこから始まると思っている。

会長 カウンセラーも同じで時間にゆとりがないと話が出来ないので、ゆとりを持って水がめをいっぱいにしないようにしている。

会長 中学校の現場はどうか。

委員 私もゆとりがなく調子が良くないと思う時もあるが、実施して良かった事例を一つ紹介したい。ホワイトボードミーティングを学級活動で年間を通して実施した。一学期の段階で「学校が楽しくない」、「行きたくない」という生徒が数人いたが、数ヶ月後、学校に行きたくないと思わなくなったという発言が出てくるようになった。私自身の感覚だが、ホワイトボードミーティングを何回も実施し、子ども同士でのやりとりを重ねることで、安心できる場が生まれたのではないかと感じた。私達教員が構えるだけではなく、子ども同士で安心な場をどんどん作っていく必要もあるのではないか。中学生は多感な時期であり、SNSのトラブルや部活動の悩みなど、とにかく抱え込んでいる子が多い。やはり、話せる雰囲気や大人や保護者、子ども同士で作り出していくことが今後の課題だと考えている。

会長 ホワイトボードミーティングの方法をもう少し説明してほしい。

委員 オープンクエスションのみで行う。例えば、私が最終的に取り組んだのは「今月どうだった」「ちょっと苦しかった」「具体的に言うと」のように質問をしながら、話す側が説明していくなかで、頭のなか整理されていく。聞く側も相槌を打つだけで会話が進んでいくので、話すのが苦手な子もトレーニングをしていけば話せるようになり、自分を表現できるようになる。

会長 子どもが子どもにということ。

委員 そうです、最初はペアからスタートしてグループでもできるし、クラス会議も最終的には子ども達だけでできるようになった。抱え込んだり我慢をずっとしていると、不登校になったりいじめにつながることもあるので、どう言語化していけばいいのか考えることが大切だと思う。子ども達は、ストレスの発散源を嫌な発言であったり、SNSに書き込んでしまったりすることもあり、つらい思いをした子も過去にいた。あと、話すことや抱え込まないことを学ぶと同時に、聞き方の練習もできるところが良いと思う。

委員 今の大人社会の風潮かもしれないが、気の利いた突っ込みをすることが上手な会話であるという錯覚があるように思う。そこで冷やかしやからかいが一般化しているような気がする。大人が良いモデルを示していく必要がある。

会長 高校はどうでしょうか。

委員 クラスで実施したお悩み相談の事例を紹介する。匿名で悩みを記入し、シャッフルした状態で複数の回答を書けるようにし、生徒達がコメントを書いて回答していく。最初は、内容の浅いものもあったが、「クラス替えが不安」「部活の先輩との上下関係が辛い」など、誰かに聞いてほしかった悩みを書くようになった。生徒たちがお互いの悩みに対し温かくアドバイスすることで、人間関係が深まり良い試みだったと感じている。高校の教員も、何気ない会話をするような心のゆとりが少なくなっていて、仕事に追われている時期があるのも事実だと思う。生徒は大人以上に自分達の集団の人間関係をよく見ており、生徒の言葉を使うとスクールカーストとかクラス内の人間関係にすごく敏感だと思う。もう一つ気になっているのがいじめの認知件数で、高等学校は県内でのいじめが25件であるが、いじめとして認知される以前のいじめに繋がるような人間関係のトラブル等が日々起こっていて、それを担任や部活の顧問、現場の教員が解決しているので認知件数が減っているのではないかと思う。今後、人間関係の調整力や構築力というものを何らかの形で育てていくことが高校でも必要ではないかと考えている。

- 会長 大人から言われるよりも同級生にしか分からないアドバイスをもらえそうで良いと思う。先程のホワイトボードミーティングもそうですが、すごく良い取り組みをご紹介していただき参考になった。
- 委員 資料3の不登校・いじめパッケージの内容をどのように実行していくのか。また、働き方改革等について県でどういう改革を検討していくのか、プランは今後あるのかという二つのことをお聞きしたい。
- 会長 事務局の方をお願いしてよろしいか。
- 事務局 いじめ緊急対策パッケージについて、現在、不登校児童生徒の学びの確保を推進している。今年度、校内支援センターを県内5カ所学校に設置し、不登校の児童生徒への支援を行っている。また、様々なフリースクールや、学校以外の学びの場と情報共有の連携をしっかりと進めていきながら、児童生徒の支援に取り組んでいるところである。いじめについては、各市町村の教育委員会とも今後連携し、いじめの見逃しを無くしていくという強い姿勢で強化していく。また、重大事態にならない取り組みを充実させていきたいと考えている。それから働き方改革については、県教育委員会と市町村教育委員会は、以前から様々な対策を進めているが、教育相談の充実ということで、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、スクールロイヤー等の専門家や関係機関との連携を通して、教員が抱え込む仕事の負担を削減していければと考えている。
- 委員 私の意見だが、働き方改革の話をさせてもらおうと専門家との連携については、これまでもされてきたと思うが、学校の業務の負担を軽減するということには直接的につながらないのではないか。様々な政策や、実施している業務を今後どう減らしていくか、どこのどういう部署が学校等でさせているのかを把握していただいて、行政で学校への負担軽減をどうするのか是非考えていただきたい。もう一つは、学校現場への指導として行事の精選が必要ではないか。コロナを機に精選が進んだが、元に戻りつつあると思う。教育内容自体に踏み込まないと削減できないとっていて、本当に効果があるのかといった中身の事についての指導や提案をしていかないと、なかなか学校現場のみでは負担軽減の改善ができない

実態があるのでご検討いただきたい。

会長 行政でよい政策を考えて、学校の先生方がもう少しゆとりを持って子どもに接することが出来るようになってほしいとつくづく思う。

委員 冷やかしゃSNSによる誹謗中傷はよく聞く話で、いじめとして微妙なラインもあると思うが、資料1のそれ以外の内容については確実に心理が働いてのいじめで健全ではない。アプリによる心の診断なども、学校にいけなくなった子ども達やいじめられている被害者だけではなく、いじめの加害者にも実施しケアをしてほしい。また、周囲の保護者からの話では、学校に相談したけど聞いて貰えなかったことや、誰に相談したらいいのか分からなかったことで嫌な思いをし、家族ごと学校と壁ができてしまった方もいると聞いた。保護者や本人、それを見守る友達に相談する場所があるとアナウンスすることで、安心して学校に送り出せるのではないかと思う。

会長 いじめてしまった児童生徒さんも心の傷を負っている場合もあるし、そのケアも必要である。それから、保護者の方も対応してくれた方もたくさんいると思うが、対応してもらえなかったと感じ不満が残るケースもある。その辺はもう少し風通しが良くなるように工夫し、連絡を密にすれば保護者と協力体制が築けるのではと聞いていて感じた。

委員 叩かれたり、蹴られたり、金品をたかられる等の犯罪行為について警察は、学校や保護者の意見を尊重しながら適切に対応している。また、少年法は健全育成の観点もあり、すべてを処罰すればいいというものでもない。加害者の更生という目的もあるので、すべてを事件化せずとも警察が指導もできる。学校や家庭の指導だけでなく、警察の立場で「そういった行為は犯罪になるよ」という指導ができるので、連携していけば良いと考えている。今日のラジオ番組でいじめ関連の番組を聴いた。アプリを開発している会社の方が自分もいじめを受けていたが、親に心配させるので相談できず友達にも言えなかった時に、先生がいつもと違う様子に気付いてくれて、解決することができたという内容だった。その経験から、匿名で相談できるアプリの開発に繋がったそうだ。未然防止や早期発見のために、学校管理者でも初期の段階からなんでも気軽に相談してほしい。

会長 警察に相談となると重大になってからするものだと思ってしまうがちだが、初期段階から気軽に相談することができればより早く解決につなげることができる。

委員 まずは、ホワイトボードミーティングをもっと早く知っていたら、もう少しコミュニケーションが取れていたかと思う。こういうコミュニケーションを使うなかで、重大ないじめにつながることをせき止められる。資料2で、認知したいじめが重大事態に発展した結果を見て、どうしたらいいのかについて何点か考えることがある。まず、いじめ防止について委員の方々の話を集約すると、やはり、コミュニケーションが大事で、コミュニケーションを取ることがいじめ防止につながる。そして、いじめ発生時には、ここまでは学校や自治体も含めての対応、ここからは犯罪だという見極めを、躊躇なくやる方が良いと思っている。二つ目は、いじめや不登校は我々が作った社会構造そのものの問題ではないかという視点も必要ではないか。子ども達だけがSNSを使用したり、様々なツールを使っていじめをしているわけではなく、大人社会も同様であり、社会のあり方と切り離して解決できる問題ではないと思っている。子ども達が豊かな社会のなかで、いじめが起きるということは、愛情やコミュニケーションが不足しているのではないかと思う。それについて、我々自身をもっと考えるべきである。資料3のいじめの緊急対策について、学校関係者や教育関係者は、どうしても自分で解決しようとするが、第三者的な立場の人が関わることで解決や対応について共感が得られるのではないだろうか。それがいじめ解決の公正公平な解決につながると思うので、いじめの重大事態のなかの責任もあるので、中高生になった時に相応の責任を問うことがあっても良いのではないかと考えている。

会長 様々な視点からまとめていただき、私達大人も含めて社会問題として捉えていく必要もあるし、子ども達や大人のコミュニケーションも大切だということ。

委員 資料1のSNSやネット上での見えにくい事案が増加しているということで、学生の立場からSNSやネットの事について話をさせていただく。ネットパトロールという言葉をよく耳にするが、ネットに書き込むというのは加害者にも被害者にもなり得ると思う。加害者に目を向けることが多いが、ネ

ットに書き込む行為は、子どもが保護者や先生、誰にも言えない悩みを打ち明ける場でもあるかなと思う。そこで、ネットパトロールを実施し、子どもの悩みを見つけるということも重要だし、早期発見にも繋がると思う。学校現場の事務的なことは分からないなかで実習に参加したが、いじめを察知することは難しいと感じた。大学では、学校の環境を整えることが大切であることを学んでおり、人的環境と物的環境を整える必要もある。

会長 先生方は、裏でたくさんの仕事をしている。ネットパトロールで書き込みをしている人に目がいきがちだけど、いじめられてしんどいとか助けて欲しいという書き込みはあると思うので、そういうのを見つけていけたらいい。

委員 資料2のいじめ発見のきっかけを見ると、本人からと保護者からの訴えが一定数あるが、学校の現場の先生方が忙しくて相談できる状況ではないという話を子どもから聞いたことがある。私は、他の保護者とコミュニケーションを取るように心がけているが、先生に相談しにくいという話はよく聞いている。担任の先生の他に、相談できる先生はいませんかと聞かれることもある。分かる範囲でアドバイスはするが、子どもや保護者が先生に相談しやすい環境を整えてほしい。そうした状況になると、いじめも少なくなり重大事態になることも減ると思う。

委員 教員が多忙でゆとりがないと話したが、相談はいつでも受けるので気を遣っていただかなくても大丈夫。でも実際に、そう感じられているということは、そういうことなのだと思う。ただ、決して忙しいから相談に対応できないということではなく、その部分こそ大事に対応し、子どもや保護者に寄り添っていきたい。相談して話をする中で分かることもあるし、連絡を密に学校と家庭が連携することが大事だと考えている。

会長 学校の先生は、保護者の多様な意見を聞きたいので躊躇せずに言っていただきたい。そこが一番大事だと先生方は思われている。

委員 昨年、こどもCRTで要望のあった学校と関わりを持ったが、そのなかで感じたのは、先生方が細やかに子ども達の様子を

捉えて話を聞いており、素晴らしいと思った。先生方が、ゆとりがない状況で相談されていることを聞いて改めて敬服した。ご相談いただいた先生方を見ていると、心配するあまり表情が眉間にしわが寄ってしまって、子ども達に向ける顔が心配顔になっている。子ども達は、先生方の表情を鏡のように見てとり、「自分は心配されているのだ」と不安になってしまうので、笑顔を向けてくださいと話をしたことがある。やはり、ゆとりがない時こそ笑顔を向け合う事が大事で、生徒さん同士もそうだが先生方も同様である。いじめの件数が多いと、問題があると捉えられがちだが、隠れていたものが見えるようになり、対処ができると捉えることもできる。だから、見えたものがそのままにならないようにしていただきたい。認知していたけれども重大事態に至ってしまったケースもあるという結果を受けて、対応が難しい場合は専門機関等に助けを求めて、解決に向けて取り組んでいただきたいと思う。また、早期発見に取り組んでおられるが、注意していただきたいのは早期発見をすることは、いじめを見つけるということではない。いじめになる前段階で、いじめのサインではない段階で見つけることなので、いじめを見つけようとするが見えない。もっと些細なことで普段よりよく話しかけてくるとか、なかなか帰らないなとか、小さな変化に表れているので目を向けていってほしい。

会長

確かにいじめの未然防止は、いじめを見つけるのではないので、人間関係が普段と違うなというサインを見逃さないようにしていかないといけない。子ども達が楽しく学校へ行けるように皆さんで力を合わせてということだが、子ども同士や保護者、学校、周囲の大人等が関わりを持ち、コミュニケーションを図り人間関係を構築していくことが大切であるということ。また、相談窓口も充実していただいたいし、そこにはスクールカウンセラーやソーシャルワーカーという専門の方々の協力もより必要になる。さらに、教員の働き方改革についての話も出てきたので、今後、様々な視点から話し合いができればと考えている。
皆さん貴重な意見をありがとうございました。